

フィクションの統語論をめぐって

清塚 邦彦

テーマレクチャーのさいの雑然としたお話のなかから、今回はフィクションをめぐる問題に絞って考察を展開してみたい。とはいえ、このテーマについてはすでに別の機会に詳細に論じたばかりである¹。以下に書き留めておきたいのは、別著で行った論述のなかでは十分に論じ尽くしていない部分に関する覚え書きである。それは部分的にはすでに行った論述と重なるが、同時に、まだ位置づけのはっきりしないいくつかの着想・考察が織り込まれている。

1 フィクションの多義性

フィクションについて論じようとする理論家がまずとまどうのは、何をもってフィクションの具体例と見なすかに関する予備的な理解を、どう確保するのかという点である。というのも、じっさいの用例に即するかぎり、フィクションの概念はたいへんに多義的だといわざるをえないからである。

一つの意味では、フィクションとは虚偽や嘘の同義語であり、「○○の虚構と真実」といった言い方において、「虚構」は「虚偽」や「嘘」と置換しても何も問題はない。しかし、この意味でのフィクションを論ずるのならば、わざわざフィクションなどという思わせぶりの言葉を持ち出すまでもなく、真理や虚偽を問題にすればよい。もう一つの（あるいはもう一群の）意味では、フィクションとは、対応する事物が存在しない概念、とでも総括できるような側面をもった多様な事象の総称である。具体的には、道徳論の文脈においてたとえば人権がフィクションだと言われたり（ベンサム）、科学理論に登場する理論的対象がフィクションだと言われたり、心の哲学において志向的な心理状態がフィクションだと言われたり、といった場合がそれにあたる（もちろん、類例はほかにも多数存在するだろう）。

本稿で問題にしたいのは、これらと関連はもちながらも、基本的には異なるフィクション概念である。それは、大まかに言えば、文学作品の一定のジャンルの名称として流布している意味でのフィクション、ということになる。しかし、ではそれはどんなジャンルなのか、と問い返されると、早くも説明に苦しまざるをえない。それは大まかには小説の別称だ、というのがまず思い浮かぶ間に合わせの回答である。しかし、ではすべての小説がフィクションなのか。逆にまた、小説だけがフィクションなのか。こうした二通りの反問には、よくよく考えてみると、ともに「否」と答えたくなる。最初の反問に対して「否」と答えたくなるのは、われわれが小説と見なしている作品のなかには多くのいわゆる「ノンフィクション小説」が含まれるためである。また、第二の反問に「否」と答えたくなるのは、ふつうには小説とは別ジャンルと見なされている叙事詩や劇作品に関してもわれわれはフィクションという言い方を多用しているためである。しかしそうすると、かならずしも小説の全域をカバーせず、また小説以外の作品群をもカバーするようなわれわれのフィクション理解の中身は、正確にはどのように特定されるべきなのか。

このような問いかけに、いま即答することはできない。じっさい、この問いに対して唯一正しい答えがあるのかどうかも、私には定かではない。そうはいっても、文学ジャンルとしてのフィクションという概念がまったくいかなる実質ももたないとまで言うつもりはない。そこまで言うのならば、そもそもフィクションの問題を取り上げて論ずる意味はない。むしろ、真相は次のようではないかというのが筆者の見通しである。すなわち、小説や劇作品や叙事詩のなかにはフィクションの代表的な事例と目されるようなものが多数存在しているが、それらすべてをすっきりとしたかたちで包括できるような規定は容易に見いだすことができず、ある規定を取れば一部の典型事例が取り逃がされ、その部分をカバーすべき規定を取ればこんどは別の典型事例が取り逃がされてしまう、ということである。おそらく、フィクションを論ずるとは、そうした多様な規定の仕方にどのようなものがあり、またどのような規定の仕方がフィクションと関わるもっとも啓発的な展望を与えてくれるかを検討してみることにほかならない。

当然ながら、そうした検討作業にはいくつもの入り口がありうる。さしあた

り本稿の場合の入り口を明確化するために、まずは、一般にフィクションと呼ばれてきた作品群に顕著に見られる一つの特徴を挙げておくことしたい。それは、フィクションを構成している語りにおいては、語りの主体として想定される人物を、単純にフィクションの作者と同一視できないという特徴である。

こうした特徴がもっとも顕著に見られるのは、作中人物の語りによって作品が構成されているいわゆる一人称の語りの事例においてである。たとえばボオの『黒猫』はこんな一文からはじまる。

今ここに書き記そうとする奇怪この上もない、だが何の虚飾もまじえぬこの物語を、わたしは読者に信じてもらえとも、もらいたいとも思わない。

(河野一郎訳)

この文を（正確には、その英語の原文を）書き記したのは実在したボオ本人である。しかし、これをフィクションの一節として受け止めているかぎり、われわれはここでの「私」がボオ本人を指すと考えることはできない。みずからに起こった（と称される）出来事を物語っているここでの「私」は、この作品によって提示されている物語の作中人物であって、実在の作者とは異なる。

もちろん、すべてのフィクションがこのように作者とは異なる作中人物によって語られているわけではない。少なからぬフィクションにおいては、語り手は、実在の作者と同一視できないばかりか、いかなる作中人物とも同一視できない。たとえば、こんどはカフカ『変身』の冒頭を考えてみよう。

グレーゴル・ザムザはある朝、たて続けに苦しい夢を見て目をさますと、ベッドのなかで自分がいつのまにか巨大な毒虫に変身しているのに気づいた。（高橋義孝訳）

この語りがだれによって行われているのかについて、『変身』のなかにははっきりとした手がかりがない。だからといって、この語りを作者自身による額面どおりの主張と見ることもできない。カフカはザムザが実在することやその周囲で起こった出来事について本当に主張を行っているわけではない。こうした場

合に、作者とも作中人物とも異なる実体の希薄な語り手を想定するか、そもそもこの種の事例では語り手は存在しないのだと考えるかについては、理論家のあいだで見方がわかれる。しかし、こうした場合にも一定の「語り」が提示されていること、しかもそれが単純には作者本人に帰されえないこと、その二点はおおかたが認めるところであろう。そして、さしあたり本稿においてフィクションの目印と見なしたいのは、このように「語り」が作者から遊離するという事態である。

2 フィクションの言語行為

前節で取り上げた作者と語りの分離という事態は、何を意味し、何に由来するのか。この点をめぐる分析哲学者の議論が、しばしば言語行為をめぐる考察というかたちで行われてきたことは、広く知られている。通常の主張その他の言語行為とくらべた場合に、フィクションを構成する発言行為はどのような性格をもつのか、というのがそこの基本的な設問である。私はこうした設問自体をここで問題視するつもりはない。それがもつともな設問であり、またフィクションの本性を理解する上で重要な問いであることはまちがいないように思われる。しかし、残念な点としてここでふれておきたいのは、こうした語用論重視の姿勢が、おおくの場合に、統語論的な考察の軽視というかたちを帯びてきたことである。その典型例としては、何よりサールの次の発言を引用しておくべきだろう。

統語論的と意味論的とを問わず、テキストをフィクションたらしめるようなテキスト上の性質は存在しない。それをフィクションたらしめるのは、作者がそれに対して持つ発語内の構えとでも言うべきものであり、その構えは作者がそれを書いたり構成したりするさいに持つ複雑な発語内の意図の問題である²。

私はここに示されている語用論重視の姿勢自体には、とくに異論を唱えるつもりはない。問題視したいのは、統語論的・意味論的な考察の意義がほぼ全面的

に否定されている点である。というのも、それは明らかにまちがいだと思われるからである。この点をサール自身の論述に関連づけて鮮やかに指摘している文学理論家ドリット・コーンの指摘を次に取り上げてみよう。

サールは、フィクションを構成している一連の発言の特徴を論ずるなかで、言語行為論の道具立てに沿って、たんに一定の統語論的・意味論的特徴を持った文を発するという発話行為のレベルと、そのような文の発話が一定の社会的コンテキストのなかで一定の発語内行為として認定されたり、されなかったりするというレベルとのあいだの落差に注目した。そして、虚構的な発言の特質は、発話行為のレベルにではなく、発語内行為のレベルにこそ見いだされるというのが、サールの基本的な立場である。そのような立場の裏付けとして、サールは、アイリス・マードックの小説の一節と、新聞記事の一節とをならべて、どちらも発話行為としてみるかぎりにはフィクションともノンフィクションとも判別しがたいことを指摘している。そのさいに引用されたマードックの一節は、こんなふうである。

馬のいない輝かしい暮らしがあと十日だなんて！ 名高いエドワード王騎兵連隊勤務を命じられて間もないアンドリュウ・チェイス・ホワイト少尉は、一九一六年四月のある暖かな日曜日の午後、ダブリン郊外の庭園を満ちたりた様子でぶらつきながら、そう考えた³。

しかし、コーンは、この一節に触れて、こんなふうに述べている。

話し手以外の人物の思考を引用するような「真面目な」談話なるものがそもそもありえたであろうか⁴。

この反語的なコメントにおいてコーンが注目しているのは、サールが引用した一節が、いわゆる「自由間接話法」（別名「体験話法」）を用いているという点である。自由間接話法とは、本来ならば本人にしか分からないような内面の状態について、本人が第一人称で語る代わりに、本人とは異なる語り手が第三人称で語るような語り口を指している。こうした語り口は、歴史上の出来事を

実在の人物が報告するさいには取ることができないはずのものである。事実の報告の場合ならば、他人の内面についての語りの多くの部分は、内面を直接に話題とする代わりに、むしろその外面的な現れに言及し、そこからの推測として内面が語られることになる。ところが、フィクションにおいては、本来ならば本人しか分からないはずの事柄が、当人とは別の人物によって、第三人称で断定的に語られる（その極端な例としてコーンが挙げているのは、死に際の主人公の内面を三人称形式で克明に記録していくような語り口である）。おまけに、こうした場合の語りは何者によって行われているのか——いったいだれが問題の人物の内面をそんなによく知っているのか——については、作品自体の内には何も手がかりが示されていないことが少なくない。こうした特徴は、文学理論家によるフィクション研究（K・ハンプルガー、G・ジュネット、D・コーン）のなかでは、フィクションに固有の統語論的特徴として重視されてきた⁵。そして、まさにその特徴が、統語論的考察の意義を否定しようとするサールの議論のさなかに顔をのぞかせている、というのがさきほどのコーンの指摘の趣旨である⁶。

こうした批判的な指摘に対して、サールの流れを汲む分析哲学者はどのように応答しうらうだろうか。

おそらく一つの応答は、サールらが問題としているフィクションの概念と、コーンら文学理論家たちが統語論的な視点から特徴づけようとしているフィクションの概念とが、重なる部分はあるながらも、じつは異なる概念であることを指摘する、というものだろう。つまり、両者の議論はすれちがっているのであり、コーンの指摘は的をはずしている、というわけである。

そのような食い違いがいを如実に示すと思われるのが、いわゆる「ノンフィクション小説」の扱いである。サールやカリール分析哲学者は、「ノンフィクション小説」の類を文字どおり「ノンフィクション」だと考えている⁷。そして、彼らがそうした考えを自然だと見なしたことは、おそらく、彼らが、さきのサールの発言にも見られるように、発話者の意図に重心を置いていたことと、密接に関連している。彼らの考えでは、フィクションを構成している一連の発言は、通常の主張のさいに用いられるのと同じような文を用いた発話行為であることはまちがいないが、しかし、通常の主張が成り立つために必要な一連の前提条

件にしたがうことを、あからさまに拒んでいる。つまり、虚構的な発言においては、主張を偽装する行為を行うことは意図されているが、当の主張の行為を行うことまでは意図されていない。ところが、「ノンフィクション小説」の場合には、小説家は、小説において語られた一連の事柄がまさに事実であることをはっきりと主張している。そもそもそれらが「ノンフィクション」と呼ばれるのは、そのような主張の意図が歴然としているためである。このようにあからさまな伝達意図が伴う点で、「ノンフィクション小説」は、日記や伝記や歴史記録の類と共通している、というのがおそらくはサールらの見解である。

だがその一方で、「ノンフィクション小説」は、自由間接話法をはじめ、フィクションに固有の語り口を呈しているという点では、通常のフィクション作品と変わらない。それゆえ、語り口に即してフィクションを特徴づける文学理論家からすれば、これらもまたフィクションの一種だということになる。こうした方がいいは、コーンとサールらの議論が、そもそもの予備的な理解の段階で食い違いが起きていることを示しているようにも見える。念頭におかれている対象群が異なる以上、問題とされているフィクションの概念自体が異なっている、というべきではないか。

とはいえ、私見では、サールとコーンのあいだの対立関係をこのようにたんなるすれちがいと見なしてしまうのは安易であり、あまり啓発的ではない。というのも、じつは「ノンフィクション小説」をどう位置づけるかという点は、サール流の立場にとっては意外と厄介な問題を孕んでおり、コーンの批判は、致命的ではないまでも、やはり急所にふれているように思われるからである。

そのことをはっきりさせるために、まず、一般には典型的なフィクションと目されている作品の場合にも、じつはさきほど「ノンフィクション小説」に即して指摘したようなあからさまな伝達意図が伴うことが、けっして珍しくない、という点に注意を促しておく必要があるだろう。分かりやすいところでいえば、一般的な通念として、優れた文学作品は、一定の人生観や世界観を表現しているものと見なされており、読者がそれを作品の元に見いだすことは、明らかに作品制作にあたっての作者の意図の一部であったと思われる。もちろん、伝達が意図されている内容をどのように特定するかは、むずかしい解釈の問題である。しかし、どのように特定されるにせよ、一定の人生観・世界観を提示しよ

うという意図は、多くの場合には歴然としている。そのかぎりでは、すぐれた文学作品は、それが典型的なフィクションに属する類のものであっても、明らかに一定の伝達意図をそなえている。

おそらくこうした指摘に対して、サールをはじめとする論者ならば次のように応答するだろう。つまり、たしかに上の指摘の通り、フィクションには多くの伝達意図が伴うが、それらの意図は、いずれも、間接的な伝達の意図ではない。たとえば、かりに、『アンナ・カレーニナ』が一定の人生観の正しさを主張していることを認めるとしても、そのことはけっして、この作品がその文面通りの主張の意図を伴っているということを認めることではない。この作品の文面を構成している語りのほとんどの部分は、額面どおりの主張とは認められないし、それらが額面どおりの主張となることが作者によって意図されているとも言えない。そして、まさにその点こそが、この作品がフィクションであるということの実質にほかならない……。

これはもっともな指摘である。しかし、それがさきほどのわれわれの反論に対する抗弁にはなっていない、という点もまた、明らかだろう。というのも、まさに同じような指摘は、さきほどの「ノンフィクション小説」にもあてはまるからである。「ノンフィクション小説」の場合も、作品を構成している一連の語りは、けっして、作者自身による額面どおりの主張行為にはなっていない。語りは作者とは異なる作中人物によって、あるいは特にだれとは特定できない所在不明の語り手によって行われており、それを実在人物による現実の主張行為と解することができないという点は典型的なフィクションの場合と同様である。

こうした事情にもかかわらず、「ノンフィクション小説」がまさにノンフィクションと考えられたのは、そこに間接的なかたちにおいてであれ、伝達意図が伴うという事情のためである。しかし、さきほど確認したように、同じような間接的主張の意図ならば、サールをはじめとする論者が典型的なフィクションと見なすであろう作品群にも見いだされるのである。

こうした事情をどう考えるのかについて、語用論重視の姿勢を取る理論家たちの態度はあまり明確ではない。しかし、次の点ははっきりしているように思われる。すなわち、典型的なフィクションの場合にも、いわゆる「ノンフィク

ション小説」の場合にも、伝達意図が存在するという点でははっきりしたちがいが無いのだとすれば、あえて両者を区別する理由は、それとは別の要因に求められねばならない、ということである。はっきりしないのは、それが何なのかである。この点で、言語行為論的な諸理論は（とりわけ、発話者の意図に力点を置いた諸理論は）、明らかな説明の欠落部分を抱えているように思われる。だが、その点の説明が欠けているかぎり、サールらの議論がコーンらが問題としていたのとは異なるフィクション概念を主題としている、という見方からも、説得力が削がれると言わざるをえない。典型的なフィクションの場合と同様の語り口で語られている作品群に関して、あえてその虚構性を否定し続ける理由はどこにあるのか。伝達意図の存在がその説明にならないとすると、何が理由になるのか。この点についての説明がないことは、次のような推測に一定の（あくまで一定の、だが）裏付けを与えることになるだろう。つまり、サールをはじめとする論者は、コーンをはじめとする統語論重視の論者と同じフィクション概念について、まちがった説明を与えていただけだ、という推測である。

3 統語論と語用論

さて、これまでのところでは、発話者の意図に力点を置いたサール流の議論の問題点に考察の焦点を置いてきた。しかし、もしもサール流の語用論重視の理論構成が大きな困難を抱えているとすれば、これまでの話の流れからすれば、私はもう一方の統語論・意味論重視の理論構成に加担しているということになるのだろうか。

たしかに、私は、さきのコーンらが重視したような、一連の統語論的特徴を尊重したいと考えている。そのかぎりでは、私は、それらを軽視したサールらの陣営とは対立している。しかし、統語論的な特徴の重要性を認めることは、けっして、語用論的な特徴の重要性を否定することと、同じことではない。そして、私が擁護したいのは、（あまりに月並みと言われそうだが、）統語論的な特徴におとらず、語用論的な特徴もまた重要だ、という立場である。あるいは、こんなふうに言い換えた方がいいかもしれない。つまり、統語論、意味論、語用論、という通例の記号研究の区分をあまりに厳格に受け止めて、それぞれに

よって明らかになる特徴がたがいにまったく独立であるかのように考えるのは実態に反するのだ、と。たとえば、語り手と作者の分離、というさきに挙げた特徴は、そうした分離の具体的な現れである自由間接話法等の語り口に即して考えれば統語論の問題のようにも見えるが、作者による作品の提示の仕方の問題として考えるならば、語用論の問題でもある。そして、これら二つの問題は、たがいに独立の問題ではない。むしろ、同じ事柄の（つまり、作品の虚構性ということの）異なる二つの側面であるにすぎない。そして、フィクションにはその他にさらにどのような統語論的な特徴があるかを検討することは、フィクションを提示するという行為がどのような性格をもつかに関する語用論的な考察の進展とも不可分であるように思われるのである。

こうした考察に側面から照明を与えてくれるかもしれない小話として、最後に簡単に、ボルヘスの小品『ドン・キホーテ』の著者、ピエール・メナールにふれてみよう。それは、記号列という意味では『ドン・キホーテ』の一部分とまったく区別がつかないような本を、『ドン・キホーテ』の複製や剽窃としてではなく、まさに自分自身の作品として執筆する風変わりな小説家メナールの物語である。この小品の語り手は、この奇妙な本をはじめとするメナールの業績について簡単な紹介を行った上で、問題のメナールの本がセルバンテスの『ドン・キホーテ』とは多くの異なる特徴を持つことについて、やや踏み込んだ考察を行っている。一つのきわだったちがいは、文体である。セルバンテスの『ドン・キホーテ』は17世紀の平明なスペイン語で書かれているのに対して、メナールの本は20世紀の外国人の手になる擬古的な文体で書かれている。さらに、ちがいは作品が提示する世界にまでおよんでいる。たとえば、『ドン・キホーテ』第一部第九章には次のような一節がある。

……真実、その母は歴史、すなわち時間の好敵手、行為の保管所、過去の証人、現在の規範と忠告、未来への警告⁸。

ボルヘスの小品の語り手は、『ドン・キホーテ』のこの一節については「歴史へのたんなる修辭的な賛辞でしかない」とそっけない評価を下しているが、メナールの本に出てくる同じ（記号列としては同じ）一節については、次のような

評価が下されている。

……この考えは驚嘆に値する。ウィリアム・ジェイムズの同時代人であるメナールは歴史を、真実の探求ではなく、その源泉と規定する。歴史的眞実は彼にとって、かつて起こったことではない。かつて起こったとわれわれが判断するところのものなのだ。末尾の句—— **現在の規範と忠告、未来への警告** ——は臆面もなく実用的である⁹。

同じ記号列でありながら、その内容についてこのように大きく異なる評価が下されるのは、なぜなのか。言うまでもなく、それは、作品の内容を読み解くにあたっては、頁上に記された記号列だけでなく、それがだれによってどのような時代背景の下で書かれたか、といった社会的なコンテキストが解釈の準拠枠として援用されるためである。『ドン・キホーテ』はセルバンテスや彼が生きた17世紀のスペインという時代背景に照らして作品世界が理解されるのに対して、メナールの本は、20世紀の時代状況に照らして作品世界が構築される。

こうしたちがいをきわだたせるために、ここで「テキスト」と「作品」という二つの用語を区別してみよう¹⁰。「テキスト」というのは、ここでは、本の本体を構成する記号列としよう。他方、「作品」は、上に区別されている『ドン・キホーテ』とメナールの本のように、それぞれ一定の社会的コンテキストに準拠して解釈を施されているかぎりでのテキストを指すものとしよう。こうした用語法に即せば、ボルヘスの小品は、本稿の問題に即せば、次のようなメッセージを伝えているように思われる。つまり、ある本がどのようなフィクションであるか（あるいはまた、そもそもフィクションであるかどうか）は、テキストのレベルではなく、むしろ作品のレベル（図式的に言えば、テキスト＋社会的コンテキストのレベル）の問題なのだ、と。

このような視点から考えるならば、作品の虚構性の問題を考えるときに、もっぱらテキストそれ自体の特徴に注目しようとしたり、逆にまた文脈的な要因ばかりに焦点を置こうとしたりするのは、あまり賢明な選択とは思われない。むしろ、従来のフィクション論のなかでフィクションの統語論的・意味論的・語用論的特徴として挙げられてきたものは、いずれも、目下の広い意味での「作

品」それ自体にそなわる特徴、として総括することができるはずである。フィクション概念をめぐる研究は、記号研究の三区分からくる必要以上の呪縛からは解放されなければならない。そのことの指摘をもって、まずは本稿の結びとさせていただきます。

注

¹ 清塚 (2009) .

² Searle(1979), pp.65-66. [邦訳、107～108 頁。]

³ この箇所は Searle(1979), p.61 [邦訳、101 頁] に引用されている。

⁴ Cohn(1999), p.117.

⁵ Cf. Hamburger(1968), Genette(2004), Cohn(1999).

⁶ フィクションに固有の統語論的特徴としてあげられる他の例については前注の著作、ならびに清塚 (2009) の第一章を参照。

⁷ たとえば Searle(1979)では『冷血』や『夜の軍隊』がとくに説明もなく「フィクションではない」とされている (p.58 [邦訳、96 頁])。

⁸ ボルヘス (1992)、65 頁。

⁹ 同上、66 頁。

¹⁰ この区別は Goodman & Elgin(1988)の第 3 章に想を得たものだが、そこでの規定とはかならずしも合致していない。

文献

Cohn, Dorrit. (1999) *The Distinction of Fiction*, The Johns Hopkins University Press.

Currie, Gregory. (1990) *The Nature of Fiction*, Cambridge University Press.

Genette, Gérard. (2004) *Fiction et diction : précédé de Introduction à l'architexte (publiés initialement en 1991)*, Seuil. (ジュネット, ジェラルール (和泉涼一, 尾河直哉訳) (2004) 『フィクションとディクション: ジャンル・物語論・文体』水声社.)

Goodman, Nelson. & Elgin, C.Z. (1988) *Reconceptions in Philosophy*, Routledge. (グッドマン, ネルソン&エルギン, C. Z. (菅野盾樹訳) (2001) 『記号主義』みすず書房.)

Hamburger, Käte. (1968) *Die Logik der Dichtung*, 2 Aufl, Ernst Klett Verlag.

Searle, John R. (1974-5) "The Logical Status of Fictional Discourse", in Searle (1979), pp.58-75.

Searle, John R.(1979)*Expression and Meaning*, Cambridge University Press. (サール, J. R. (山田友幸監訳) (2006) 『表現と意味』誠信書房.)

清塚邦彦 (2009) 『フィクションの哲学』 勁草書房.

ボルヘス, J. L. (鼓直訳) (1993) 『伝奇集』 岩波書店 (岩波文庫).

(きよづか くにひこ／山形大学)